

企画展 いしかわの工芸 文化の深み ~わざの美 表現の美~

特別陳列 きらめく美 北陸ゆかりの^{きりかね}截金作家たち【近現代工芸】



二代浅蔵五十吉《釉彩華陽飾鉢》
—「いしかわの工芸 文化の深み ~わざの美 表現の美~」より—



西出大三《木彫截金彩扇面秋の合子》
—「きらめく美 北陸ゆかりの截金作家たち」より—

■ 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅱ【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 石川の文化財Ⅱ【古美術】

■ 人物画の世界【近現代絵画】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 企画展Topics 花木にみる 日本美の心
- 展覧会回顧 没後35年 鴨居玲展 一静止した刻—
- 美術館のお仕事紹介（インターネットで美術館編）
- 12月の行事予定

いしかわの工芸 文化の深み ～わざの美 表現の美～

主催／石川県立美術館 後援／北國新聞社

11月8日(日)～12月20日(日) 会期中無休

学芸員の眼

第一章「秋冬風景」にて展示している紺谷力《彩塑人形「神事鶺鴒祭」》は、石川県羽咋市の氣多大社で、毎年十二月十六日に行われる神事を題材としています。これは、鶺鴒を神前で放ち、その動きによって翌年の豊凶を占うというもので、鶺鴒は七尾市の鶺鴒浦で捕獲され、三人の鶺鴒捕部うとりべによって徒歩で氣多大社まで運ばれます。本作品はその神事を象徴的に表現しています。

人形は伝統工芸の一ジャンルとして数えられていますが、鑑賞性の高さという点で他の工芸作品とは一線を画しています。その道具としての機能を、人々の願いが託されてきた形代ひとがたとしての人形に求めることができるとすれば、神事という願いを形にする行いを体現する本作品は、人形の工芸たるゆえんを物語っているとさえいえるでしょう。



紺谷力《彩塑人形「神事鶺鴒祭」

今回の展示は、三つの展示室を使って三章構成としています。第一章は「秋冬風景」、第二章は「わざの美」、第三章は「表現の美」です。第二章と第三章は、それぞれ伝統工芸系あるいは日展系の工芸作品を集めたものですが、第一章は系統に関わらず、秋と冬の季節に合わせた作品を取り合わせています。

工芸はそもそも私たちの暮らしから生まれたものであり、日本の四季折々の生活と密着した道具でした。これら道具のなからやがて、美術へと近づいていくものや、茶の湯という、ある意味生活を純粋化した世界において、「お道具」として用いられるものなどが現れてきます。

例えば三代徳田八十吉《深厚釉線文壺》は、壺と名付けられてはいますが、その口は身に対して非常に小さく、壺として使うことは難しいでしょう。このこ

とは、私たちが壺を使うだけでなく、見るものとして扱ってきたことを物語っています。日常の器に美を見出すという私たちの行為は、民藝運動や侘茶にまでさかのぼることができるでしょう。そのようにして美しさを見出されてきた道具たちは、より見られることを意識した形となり、いまや工芸作品として美術館に展示されている。そういう風に考えてみることもできるかもしれません。

◆観覧料

一般…六〇〇円(五〇〇円)

大学生…五〇〇円(四〇〇円) 高校生以下無料

※()内は、二十名以上の団体料金。当館友の会員と六十五歳以上の方は団体料金に割引。



三代徳田八十吉《深厚釉線文壺》

第5展示室【近現代工芸】 特別陳列

きらめく美 北陸ゆかりの^{きりかね}截金作家たち

11月19日(木)~12月20日(日) 会期中無休

学芸員の眼

截金は、ごく薄い金などの箔を何枚か焼き付けて、弾力性を持たせ、これを極めて細い線や細かい方形に切り、貼り付けて文様を表す装飾技法です。時がたつとはがれやすくなるため、作家たちはさまざまな工夫を凝らしています。遺族の方によると西出大三は、ホルマリン液を入れた容器と、截金を施した作品を一緒に袋に入れ、一昼夜置いてから取り出していたようです。この根拠について、様々な方にお聞きしても、確たる答えが得られませんでした。

別件で、昭和三十四年(一九五九)に発行された『今日の人形 鑑賞と技法』(近代人形美術会編・日本経済新聞社)を読んでいたところ、人形作家の野口晴朗による技法の解説の中に、ホルマリンで仕上げをすると、剥落しにくくなるという記述を見つけました。当時日本伝統工芸展では、人形と諸工芸は同じ第七部会でした。西出はこの本の技法を参考にした可能性があります。



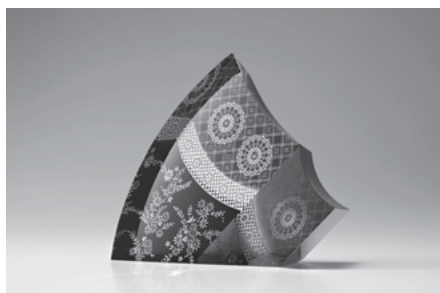
西出大三《香牛》

本年は、石川県加賀市出身で、截金の人間国宝・西出大三の没後二十五年であり、本展はこの節目を記念して開催するものです。

高瀬孝信は関西生まれですが、疎開で富山県に在住していました。高瀬の作品は、主として神代杉の木地に、幾何学文をアレンジした模様を截金で施しています。截金最初の間国宝となった、師の齋田梅亭(一九〇〇~一九八〇)は、西本願寺専属の截金仏画師を家業とする家の六代目でした。工芸に截金を応用するにあたり、齋田は水溶性の樹脂を用いて、金箔を堅牢に接着しました。高瀬が、截金を施した上に樹脂でコーティングし、その上にも截金を施すことを

山本茜は金沢市の生まれです。京都市立芸術大学で模写を学んだ際に、截金の箇所は金泥で描くようにという指示に納得できなかったことが、截金研究への第一歩でした。描かれた時代に用いられた技術を知りたい思いで、人間国宝の江里佐代子(一九四五~二〇〇七)に師事しました。伝統的な技術を身に付けた山本は、截金を表現の主体にするために、透明なガラスの中に截金が浮いているような技法を創案します。

江里は、截金は本来仏教美術のもの、という立場で工芸作品を制作していました。そのような師の下で、古の職人の技術を学んだからこそ、山本は截金をもっと表現したいという思いが生まれたのではないのでしょうか。



山本茜《胡蝶》

加賀藩の美術工芸Ⅱ

11月19日(木)～12月20日(日) 会期中無休

学芸員の眼

「前田家は菅原道真を家祖とした」と前号の美術館だよりに記しましたが、このことについて述べてみましょう。徳川家光が各大名に提出させた系図をもとに編纂した『寛永系図伝』には、前田家についてこう記されています。「中納言前田利常は(中略)、菅原道真の子孫である。道真は大宰府で二人の子を設け、兄は前田、弟は原田と名乗った。その後、前田は尾張に移って暮らしていた」と。その真偽はともかく、前田家は利常の時代から道真の子孫であると公言するようになり、五十年ごとの道真のご神忌には、道真を祀る京都・北野天満宮へ太刀を奉納し続けました。こうした前田家における天神信仰、特に綱紀時代の証が、現在展示中の国宝《類聚国史》の収集や、来年二～三月に紹介する《荏柄天神縁起絵巻》の入手です。

《荏柄天神縁起絵巻》は、源頼朝が鎌倉幕府の鬼門として建てた荏柄天神社に伝わった天神絵巻で、元応元年(一三一九)に藤原行長によって同社に奉納されました。綱紀の時代に前田家へ渡ったのです。

前号の美術館だよりでは、菅原道真によって編纂された国宝《類聚国史》を紹介しました。その中で、「古代より鳥類はめでたい献上品として重宝されていた」と記しましたが、こうした鳥類への関心は、近世に至ってもなお高かったことが《真鳥羽入箆筒》よりうかがえます。

《真鳥羽入箆筒》は、五代藩主前田綱紀によって分類整理された鳥の羽が納められた箆筒です。綱紀は鳥類や植物といった自然科学の分野にまで幅広く関心を寄せました。そして、これらの羽は清水九兵衛による豪華な蒔絵の装飾を持つ箆筒に大切に保管されたのです。

清水九兵衛は、今日に至る「加賀蒔絵」の祖とされる蒔絵師のひとりです。元々藩祖利家の時代から呉

服御用として前田家に仕えた清水家は、三代利常の時代に細工人となって蒔絵の仕事をはじめました。

五代目にあたる九兵衛は、江戸において蒔絵を学んだと考えられています。十一月十五日まで展示した《老松蒔絵硯箱》は、蓋裏に「行年八十五／清水柳景(花押)」の銘の入った九兵衛晩年の作品でしたが、この大きな箆筒は九兵衛の代表作になります。見所は、箆筒の周りを囲むように施された岩に打ちつける波の模様です。大きくうねる波、細かな波しぶき、堅固な岩肌が蒔絵や付描などの技法を用いて表現されています。

今回はその他、重要文化財の周文《山水図》や鐘、能装束など、今日まで所蔵される前田育徳会の美術工芸作品を紹介します。

第3展示室【近現代絵画】

人物画の世界

11月19日(木)~12月20日(日) 会期中無休

本展では、石川ゆかりの作家たちによる人物画作品の数々を紹介します。

日本画からは中村徹《三人の刻》を紹介いたします。当時、作者は群像表現を多く発表。舞台装置となる背景や小物は最小限に抑え、構図や姿勢、色彩など、絵画のエッセンシャルな要素だけで表現を試みました。本作も家族と思しき三人が、机の前に座っているだけ。着ている服の色や形さえわかりません。それだけに人物間の距離や視線、手指の表情など本質的な表現に、鑑賞者は注視せざるを得ないのです。

木下晋の素描作品は10Hから10Bまで二十種の濃さの鉛筆を使い、それぞれの鉛筆の持つトーンの違いを絵の具のように使い分けて人物の生き様を描いています。皮膚の皺、髪の毛の一本一本まで細密に描

き込んだリアルな画面からは、迫力さえ感じられれます。義母を描いた《想望》は、義母の生きた年月、そして、木下が義母と向き合った日々も込められた一点です。木下の作品には、モデルとなっている人物との凝縮したドラマがあるのです。

油彩画からは高光一也の《カサブランカ》を紹介いたします。高光は石川県立工業学校図案絵画科で学び、油彩の不透明性とテクスチャを生かした重厚な筆致により、多くの人物画作品を描きました。《カサブランカ》は、理想とする絵画様式の創造に苦悩し、人間の本質を描き出すことで自身の世界観と表現世界の幅を広げていった高光の人物画における代表作ともいえる作品です。



木下晋《想望》

第2展示室【古美術】

石川の文化財Ⅱ

11月19日(木)~12月20日(日) 会期中無休

多くの来場者からの声を集め、白山比咩神社が所蔵する国宝《剣 銘吉光》を引き続きご覧いただけます。本年夏に開催を予定していた「加賀百万石文武の誉れ」展に出品されると紹介され、展覧会の延期で鑑賞がかなわなくなった遠方の方からのご希望もあつて、第二期でも展示することになりました。

ほかに、県内の寺社からお預かりしている重要文化財や石川県指定文化財、金沢市指定文化財を公開しています。

その一つ、輪島市町野の金蔵寺の石川県指定文化財《両界曼荼羅図》は、胎藏界と金剛界の二つからなり、密教の種々の曼荼羅のうち最も重要なものと位置づけられています。空海によって中国から傳來され、密教が各地へ伝播していくとともに数多くの曼

荼羅が制作されました。県内に伝わるものうち最も古い作とされ、鎌倉の末から室町のはじめに制作されたと推定されています。描かれている仏は、優美な描線で色彩が施され、鎌倉特有の力強さを秘めています。一部には截金技法が使われており、極めて古い様相を示しています。

金沢市の如来寺《阿弥陀三尊来迎図》は、金沢市指定文化財です。平安時代後期から鎌倉時代にかけて、浄土信仰の隆盛に伴い、浄土教絵画、とりわけ阿弥陀如来が西方浄土から往者を迎える姿を描いた阿弥陀来迎図が多く描かれました。如来寺像は観音・勢至の両菩薩を従えた三尊形式の来迎図です。



県文《両界曼荼羅図》 輪島市 金蔵寺蔵



花木にみる 日本美の心

1月4日(月)~2月7日(日) 会期中無休

自然の中でも、とりわけ花や木を主題とした美術作品を通して、受け継がれてきた豊かな感性が結実した成果をご覧いただく展覧会です。

わが国は、国土が南北に長く、四方を海に囲まれた狭い島国です。しかしそこでは、多様な自然環境が形成され、春・夏・秋・冬という四季の変化がはっきりとしています。日本人は、この四季がはっきりとした自然に対して協調的であり、自然と共生するという態度で生活し、文化を築き上げてきました。

自然とともに暮らしてきた日本人が、自然を主題として作り上げてきた美術工芸品は、まさに自然が主役であり、自然の姿が日本人の心を代弁しています。自然の美や四季の移ろいを的確に感じ取ることができるのは、樹木や草花が示す自然の情景です。そ

して、日本人特有の微妙な感受性の世界は、こうした自然美によって育まれたものであり、日本美術の根底には、自然に対する優しい情感が潜んでいます。

花木草花は、その題材の明快さとともに、日本人の情緒的・装飾的感性を表現するのに最もふさわしいものであったことから数多くの美術作品がつくられました。

本展覧会では、山水花鳥や花木草花を主題とする作品とともに、季節の情趣をよくあらわす事物を取り上げた作品、季節感を感じさせる人々のくらしをとり上げた作品を展示し、日本美術の特色の一つといえる自然に対する優しい情感をたたえる作品を鑑賞していただくものです。

主な出品作は8ページをご覧ください。



鈴木華邨《竹梅図》



優品選

11月19日(木)~12月20日(日) 会期中無休

コロナ禍に翻弄された令和二年をしめくくる、今期コレクション展示を紹介いたします。

日本画部門の優品選は、特集「日本画のてびき」を一部展示替えして、引き続きご覧いただきます。その中で西洋画題への取り組みとして、梅川三省《大地の女神》を探り上げます。作者は、シニールな世界を描く手段として、しばしばギリシャ神話に題材を求めました。制作の前年、大病を患ったことが死と再生の神でもある「キュベレー」を描くことに繋がったのでしよう。この他、二十点の作品と資料で日本画のいろはを紹介いたします。

油彩画からは脇田和《連理》を紹介いたします。三〇〇点の脇田作品を所蔵する当館では、コレクション展で、必ず展示する作家の一人です。向かい合う鳥のモ

ティーフは脇田作品にしばしば登場し、作品名《連理》は白居易の長恨歌による「比翼連理」から名付けられています。「比翼」は、左右一対の翼と目もち、常に雌雄一体で飛ぶ想像上の鳥。「連理」は、別々の木からなる二本の枝がつながったもので、いずれも夫婦の固い契りを意味します。生涯の伴侶重子夫人と作家本人を重ねたのでしよう。

彫刻では、モデルになった女性の、クレオパトラを連想させるおっぱい頭に触発されて制作した石田康夫《古代への想い》や、力強い裸婦の表現が特徴的な矩幸成による《粧い》などを展示いたします。女性らしい仕草や身体の量感を追究した作家たちの作品をお楽しみください。



梅川三省《大地の女神》

没後35年 鴨居玲展 — 静止した刻 —

7月31日(金)～8月30日(日) 会期中無休

行き交う人々のマスク姿も、ようやく慣れてきたこの頃ですが、このコロナ禍には、美術館も大きな痛手を負いました。予定されていたすべての企画展は一度ご破算になり、その後ひと月遅れで開催することが決まった鴨居玲展も、ぎりぎりまで存続が危ぶまれました。京都、石川、久留米を巡回する予定でしたが、皮切りになるはずの京都展中止の一報には、声も出ませんでした。作品選定から図録原稿の執筆・校正等、日に何度も開催館同士でやりとりをしながら進めていただけに、断腸の思いも共有です。京都展の中止を受けて、関西方面から多くのお客様がいらっしゃいました。

そのようなコロナ禍ですが、思わぬ効果もありました。感染拡大防止のため、会場を広くとり、作品の間隔を空けた展示にしました。そこに鑑賞者が作品と対話するゆとりが生まれました。「鴨居の最期を展示する部屋では、涙がこぼれた」との声も。画家鴨居玲を世に出し、昵懇にしていた日動画廊の長谷川社長夫妻が来館された際も、「広い会場でみるといいなあ」と、一点一点噛みしめるように鑑賞されていたのが印象的でした。

五年ごとに開催する展覧会を楽しみにしているファンの方も多く、次回もまた来たいとの声も寄せられています。五年後は没後40年。当館での開催は定かではありませんが、このような石川出身の画家が愛され続ける取り組みは、当館の責務ともいえるでしょう。



美術館のお仕事紹介

(インターネットで美術館編)

新型コロナウイルスをめぐる情勢のなかで、美術館を訪れるという体験にも変化や制限が起こっている中、インターネットを活用する傾向が全国的に強まっています。当館でもこの夏、公式ウェブサイトにオンラインコンテンツをまとめたページが新しくでき、ご自宅などで気軽に美術をお楽しみいただけるようになりました。公式サイトトップページから「おうちで楽しむ石川県美」というボタンを押すとご覧いただくことができます。

十一月には、オンラインでの親子鑑賞プログラムも初めて開催しました。これからも、この場で本物を見る、人と人が対面でかかわりあうという場としての美術館のよさにプラスして、オンラインでの楽しみも広がっていきたいところです。

12月の行事予定

■土曜講座		13時30分～15時	美術館ホール	無料
5日(土)	北陸ゆかりの截金作家たち		担当課長 寺川和子	
12日(土)	人物画を対話型鑑賞で楽しむ		普及課長 深山千尋	

石川県立美術館のオンラインコンテンツ

おうちで楽しむ
石川県美



会期：令和3年1月4日(月)～2月7日(日)



中川一政《向日葵》



曲子光男《開春》



中村研一《枇杷図皿》



《青手椿図平鉢》古九谷



二代砺波宗斎《蘭花文蒔絵箱》



県文《盛上菊図》真宗大谷派金沢別院蔵



次回の展覧会

令和3年1月4日(月)
～2月7日(日)
会期中無休

		前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
		新春優品選	新春優品選
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	新春優品選 【近現代工芸】	書をあじわう 【近現代書】	花木にみる 日本美の心

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

12月7日は第1月曜日より

コレクション展示室無料の日

12月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00 年中無休

12月の休館日は
21日(月)～31日(木)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第446号(毎月発行)
2020年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。